

おのずと「やってみたい」と思える総合学習を外部スタッフと連携して展開

— 東京・都立 芦花高校 —

開校9年めとなる芦花高校では、生徒の意欲や主体性をどう引き出すかが大きな課題だった。

そこで、昨年度に外部スタッフの支援を受け、総合的な学習の時間のプログラムを一新。

大学生や外部機関の協力を得て、生徒が自ら積極的に活動してみたくなる“おもしろい”内容に生まれ変わった。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

総合的な学習の時間 外部連携によるプログラム開発 大学生の参加
コミュニケーション能力 コラボレーション能力 奉仕活動

「意欲や主体性を引き出したい」と
キャリア教育に重点

都心の閑静な住宅街に9年前誕生した東京都立芦花高校は、「文武両道と進学実現」を目指す単位制普通科高校だ。同校が現在キャリア教育に力を入れる背景には、意欲や主体性が不足する生徒の姿があった。校長の柳久美子先生はこう話す。

「本校の生徒は素直で落ち着いています。しかし、約半数が推薦で入学してくることもあり、大学も推薦でと考えると、必死に受験勉強する生徒は少ない状況です。また、単位制で好きなことができる点への期待が大きく、嫌なこと、苦手なことは避ける傾向も。授業では受け身な姿勢が目立ち、物事に主体的に取り組む意欲を育みたいと考えていました」

そうした課題に対し、2010年度、まず同校は部活動の活性化に着手。部活動を通して培った意欲や生活規律を学習面にも広げ、進路に高い目標をもってチャレンジする力につなげていこうとした。

キャリアガイダンスと奉仕の
混成プログラムを再構築

11年度からはさらに「この子たちの夢を3年後に叶えてあげようプロジェクト」を立ち上げ、キャリア教育の視点による総合学習の見直しを、外部スタッフの協力を得て2年計画で進めている最中だ。

同校では1、2年次で総合学習を行っており、11年度に見直しを図った1年次総合学習は、「キャリアガイダンス(CG)」と都立高校の必修教科「奉仕」で構成されている。週1回の連続した2時間を総合学習にあてているが、従来は前期が年度の履修登録に向けた「CG」、履修登録が終わった後期が「奉仕」と分かれていた。「CG」は履修登録に向けたガイダンスや作業が中心で、「奉仕」は意欲的な活動になりにくいという課題があった。

それをおのおのが効果的な時期に実施できるよう、2つの要素を取り入れたスケジュールに再編。各内容の充実を図り、体系的なキャリア教育を展開することを目指した。柳校長は教員研修で2年間、さわやか福祉財団で働いた経験から、「学校に協力してくれる人は外部にたくさんいる」との確信があり、随所に大学生やボランティア団体、国際協力NGOなど外部と連携する活動が組まれている。

そうした総合学習全体および「CG」のプログラムの設計は、高校でキャリア教育支援の経験をもつ平賀恵美子さん(NPO法人じぶん未来クラブ理事)、「奉仕」の部分は日本福祉大学の村上徹也教授が協力。それを都教育庁が資金面で支援し進められてきた。

細部まで工夫されたプログラムに
生徒の表情はイキイキと変化

しかしながら、総合学習の再構築はス



School Data

単位制普通科／2003年創立
 生徒数(2011年度) 710人(男子253人・女子457人)
 進路状況(2011年度実績) 大学56.5%・短大8.7%
 専門学校20.4%・就職0.9%・進路未定11.3%・その他(留学等)2.2%
 東京都世田谷区粕谷3-8-1
 TEL 03-5315-3322
 URL <http://www.roka-h.metro.tokyo.jp>

Outline

単位制の柔軟さを生かした習熟度別・少人数でのきめ細やかな学習指導や、進路希望に応じた多様な選択科目、一人ひとりを大切にする進路指導などが特徴。2010年度から3年間、東京都教育委員会重点支援校に指定。部活動加入率が高く、部活動から学習へ意欲を広げることで生徒の進路実現を目指す。外部諸機関の支援と協力による総合学習の取り組みが評価され、2011年度キャリア教育優良学校文部科学大臣表彰を受ける。

「ズに進んできたとはいえない。特にキャリア教育の核の取り組みとして内容が大きく変わった「CG」をめぐっては、現場の混乱もあつたようだ。外部スタッフ協力の話がまとまった時、11年度スタートまで2カ月をきっていた。平賀さんは柳校長と打ち合わせて同校の課題と目標を共有し、活動の方向性を確認しながらプログラム案を作成。しかし、慌ただしい時期を迎えた学校側に、外部スタッフを迎える準備をする十分な余裕がなかったという。

キャリアガイダンス部(CG部)主任の秋本先生は、11年度の「CG」を自分なりに改善しようと内容を練っている時にまったく異なるプログラム提案を受け、「戸惑った」という。秋本先生が最も気になったのは、提案内容で「CG」の大きな目的である履修登録にきちんと結びつくのか、という点だ。実際に「CG」の授業を行う担任の不安はより大きく、冷やかな反応だった。しかし、生徒の「やらされ感」をどうにかしたいと考えていた秋本先生は、新プログラム案に「乗ってみよう」と考えたという。提案内容をベースに、具体的な内容をCG部と平賀さんとすり合わせながら準備が進められた。

新プログラムでは、1年次「CG」の前半は「自分の志向を考える・やる気のある大人との出会いにより刺激を受ける」がテーマ。大学生や社会人の話をインプットしてそれを仲間と共有する活動が主だ。後半は「誰かのために・チームで協力して活動する」をテーマに、他者にアウト

図3 1年次総合学習「キャリアガイダンス」と教科「奉仕」の展開(2011年度)

時期	キャリアガイダンス(外部企画□・内部企画□)／奉仕□	協力
1学期	「キャリアガイダンス」オリエンテーション	
	大学生とワーク「高校での学び方・過ごし方」	大学生
	学習状況調査の結果分析講演会、自己分析	
	「夏休みは地域で! 社会人と! 大学生と! ボランティア」ガイダンス～準備	地域・大学生・社会人※
	自己理解・進路適性検査	
	大学生に聞く「大学の勉強と高校の勉強の関係」	シーン1 大学生
	職業人インタビューのオリエンテーション、準備	
夏休み	履修選択ハンドブックの配布と説明	
	夏休み直前 奉仕の準備・計画をしよう	※と同
	夏休み奉仕活動	※と同
2学期	職業人インタビュー	社会人
	履修ガイダンス	
	職業人インタビュー発表	シーン2
	履修ガイダンス最終確認	
3学期	前期の活動の振り返り、「風の会」カンボジア・気仙沼での活動報告	NGO
	防災教育、救急救命講習	地域
	「新1年生に芦花高校の1年間をアドバイス」準備→4月に1,2年生交流会実施	シーン3 大学生

図1 芦花高校のキャリア教育の位置づけ

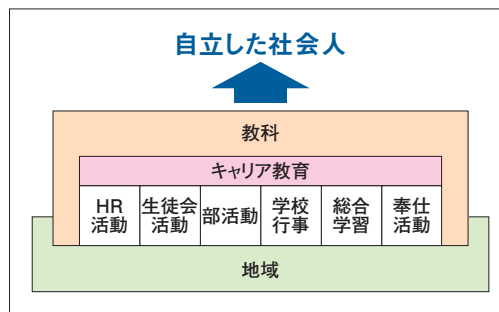


図2 身につけさせたい力

- ①人としての基礎基本(人間性、社会性、常識、教養など)
- ②次のステップに進める確かな学力(基礎基本の徹底→応用力)
- ③学ぶことへの意欲、主体的な学びへの行動変容
 - ・疑問をもつ、好奇心を高める
 - ・いろいろな答えがあることを知り自分で考える
- ④コミュニケーション能力とコラボレーション能力
 - ・広く生徒の意見を聞く、討論する、自分の考えを修正する
 - ・互いの意見、アドバイスを生かして高みを目指す、良い案を創り出す
- ⑤安易に妥協せず、自分の進路にチャレンジする力

「ブットする経験も積むという流れになっている(図3)」。
 一つひとつの企画を見ると、大学生や社会人の話を聞くなど、多くの高校で実施

されているものがほとんどだ。しかし、その手法の部分は目を引く。例えば、平賀さんや教育庁の声掛けで集まった大学生が参加する企画が1学期に2つ設けられて

シーン2：職業人インタビュー発表



夏休みに会いたい、話を聞きたい人に自分でアポイントメントをとり、仕事への思いやこだわりを取材。その報告を9月の「CG」で読む人に伝わるように、見出しをつけたり、印象に残った言葉を抜き書きするなどしてまとめる(写真)。個人作業だがグループ内でアドバイス合して進める。その発表のあと、「働くとは」についてグループで話し合い(写真)、その内容をクラス内で共有する。

シーン1：大学生に聞く



生徒は事前に配布される「大学生紹介シート」をもとに話を聞きたい大学生のところに集まり、15～20分ずつ3人の大学生の話聞く(写真)。専攻している学問のおもしろさや大変さのほか、高校の教科とのつながり、高校の時に感じた「学ぶ意味」や「自分なりの勉強法」なども語られる。生徒は気づいたことや感想をヒアリングシートにまとめる。

図4 昨年度の総合学習について生徒の振り返り

大学生に聞く「大学の勉強と高校の勉強の関係」で気づいたこと

- ・基礎が大事。やっぱり勉強って大切なんだなあ。
- ・大学のいろいろな学科や専攻を知った。ぜんぜん関係がないように見える勉強も、思わぬところでまったく種類のちがう職業につながることを知った。

職業人インタビューで気づいたこと

- ・すごいことになることを聞いた!! 仕事って面倒だと思っていたけど楽しそうだなと思った。
- ・働くのはお金のためだけでなく、人のためだと気づいた。体験だけでなく、その時の気持ちも聞ければよかった。

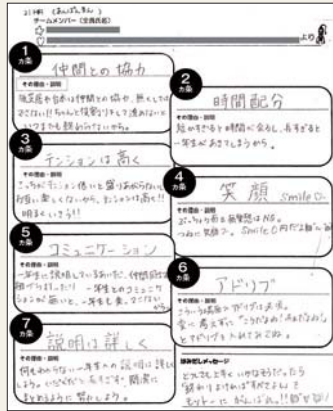
総合学習は自分にとってどんな意味があると思うか

- ・自分を見直したり、いろいろな人の話を聞くことによって、自分の人生をよりよく充実したものにする力がつくと思う。社会に出た時、同じ失敗を繰り返さないようになると思う。
- ・一番つく力だと思うのは、人のためにという「奉仕」の力。人のために自分が努力する喜びを、少しだけ知ることができた。奉仕の心というのは、社会に出てからどのような場面においても役立つことができると思う。

シーン3：新1年生に芦花高校の1年間をアドバイス



後輩への7カ条アドバイス



1年間の高校生活について反省だけでなくポジティブな振り返りをさせるのがねらい。4月にグループ別に行われる交流会の45分間は新2年生に委ねられ、行事や部活動の紹介のほか、履修登録や行事運営のアドバイス、高校生活を楽しむための心構えなどを伝授(写真左)。予定どおりになくても、時間を持て余しても、新2年生が責任をもって運営しなくてはならない。交流会終了後、新2年生はグループごとに振り返りを実施(写真右)。来年度に後輩が行う時に参考にできるよう、「後輩への7カ条アドバイス」を作成した(左図)。「キャリア教育=インターンシップ・職業人講話、ではない。校外に出ずに「仕事」を体験させることも可能」と平賀さん。

いるが、いずれも「斉講話ではなく、少人数グループ単位で実施される(シーン1)。生徒は興味をもった大学生のところにいき、間近で話を聞く。大学生側は、授業の目的や発表内容について何度も平賀さんと打ち合わせており、それぞれがしっかりと準備して授業に参加している。大学生の話に耳を傾ける生徒の様子を見て、秋本先生は考えが大きく変わったという。「真剣で楽しそうに大学生の話に聞き入る生徒の表情に、それまでのような、やらされ感はありませんでした。平賀さんの基本精神である、楽しむことの大切さを実感しました」

また、3学期の「新1年生に芦花高校の1年間をアドバイス」は、企画そのものが目新しい(シーン3)。これは、少人数グループになって3学期に企画・準備し、4月の交流会で新入生に高校生活をプレゼンテーションするというものだ。当初は「これのどこがキャリア教育なのか」という疑問もあがったが、知らない人に理解させるために企画立案からチームで取り組み、責任をもって会を運営するプロセスは、仕事そのものだという。

交流会終了後の生徒の振り返りには反省の言葉も多いが、「うまくいかなかった経験も生徒にとってはプラス」と秋本先生。この交流会がもしグループ単位でなく、1年生全員に向けて順番に舞台で発表する形だったら、成功も失敗も薄まっていたかもしれない。このように、プログラムの随所で生徒が頭と体を使い、さまざまな気

づきを得るよう仕掛けられているのだ。

生徒が成長した実感
教員の認識を変えていく

早い段階で新プログラムのおもしろさに気づいていた秋本先生は、その良さをどう他の教員に伝えたらよいかかわらず、もどかしさを感じていたという。昨年度1年次担任の小嶋津矢子先生は、「最初はうちの生徒にこんなことできるわけないと不安だらけだった」ともさすが、多くの教員が同じような感想だったようだ。

しかし、生徒の反応が少しずつ教員の意識を変えていった。学年主任の米山俊二先生は、「毎回やる前は不安でいっぱいなのですが、ふたを開けてみれば、生徒はおもしろがって取り組むんですよね」と、予想と違う展開に何度も驚かされている。当初に懸案されていた履修登録については、ガイダンス時間の減少による混乱はほとんど見られなかった。「CG」と「奉仕」の両方の刺激の相乗効果で、生徒に進路や生き方について数多くの気づきを与えたことが、1年間の振り返りコメントから見えてくる(図4)。

「この学年の生徒は言われたことをやるだけでなく、自分から積極的に動く生徒が多いと感じていましたが、活動の意味を理解しているのか不安でした。でも、1年間の振り返りを読んで、生徒はちゃんとわかって動いていたのだと気づきました」(小嶋先生)



2学年担任
小嶋津矢子先生



2学年主任
米山俊二先生



キャリアガイダンス部
高柳恵津子先生



キャリアガイダンス部主任
秋本嘉一先生



校長
柳久美子先生

1年間で成果は見えにくいですが、多くの教員が生徒の授業態度の良さを感じていること、年間皆勤賞の生徒が前年度より倍増したことなども、こうした活動の影響があるのではないかと考えられるという。

担任の意見を取り入れながら 担当者の独自性も生かす

今年度は「奉仕」に関する業務も教務部から引き取ったCG部が、人間的な力の育成のための総合的なプランニングを行っている。1年次に加え2年次総合学習のプログラム再編にも取り組み始めた。

「CG」1年次の年間テーマは「今の自分を、高校生活をおもしろく！」だ。内容は昨年度をベースに改善が図られている。また、2年次の年間テーマは「未来探究スタート。自分のために、自分で動け」。将来に向けて当事者意識をもって動けることが大きなねらいだ。自分から情報を得ていく姿勢を重視した進路情報調べや、オープンキャンパスで学生や教職員に質問して行く企画などが計画されている。

今年度の滑り出しは昨年度とは違う。教員の理解も深まり、担任の意見を聞きながら詳細を決める余裕も生まれた。担任側から「振り返り時間をしっかり確保してほしい」などの具体的な改善案もあるようになってきている。また、CG部内では、年次別の担当者がチームとなって取り組む体制ができた。2年次総合学習担当となった高柳恵津子先生からは、数時間

にわたる平賀さんとの議論をも楽しむ様子が見え、子がうかがえる。

「われわれがどう楽しく創造性をふくらませ、良いものにするかが大事。生徒の進路係が活躍する場を増やしてより生徒主体の活動にするなど、教員側のアイデアも生かしていこうと思います」（高柳先生）

秋本先生は最近、現場の教員に対して梓にはめないよう心掛けていているという。あえて大まかな指導案を作成して各担任の裁量に任す部分を増やしたり、生徒主体で活動する時間には自分の担当以外のクラスを自由に回れるようにしている。

「教員もおもしろさを感じ、個性を生かして進めてほしいですね。教員が楽しんでやれば、生徒にとっても楽しいものになるでしょうから」（秋本先生）

最初は、外部スタッフのプログラムだったかも知れないが、1年間を経て、芦花のプログラムになりつつあるようだ。

外部機関をネットワーク化し 連携体制を強化

平賀さんが同校にかかわるのは今年度までの予定だが、同校は今後も活動を継続するための体制づくりを進めている。その1つとして、昨年に同校への協力者のネットワーク「芦花高校支援本部」を発足させた。現段階でボランティア団体、NPO、公共機関、小中学校や福祉施設から30人以上が登録。学期に1回程度、地域懇談会を開催し関係づくりを図っている。

「今は外部の力に頼っていますが、数年後は卒業生が戻ってきて、後輩のために、芦花高校のために、在校生にかかわってくださるようになってほしい。」

柳校長は期待をこめてそう語る。開校間もない若い高校だが、そうして先輩から後輩へと同校の精神が受け継がれ、伝統になっていくかもしれない。

Interview

具体的な言葉でゴールを設定し 生徒が「おもしろそう」と 思える仕掛けを



平賀恵美子さん

子どもの体験活動プログラムの開発・運営や学校のキャリア教育の支援活動を行う、NPO法人じぶん未来クラブの理事。芦花高校以外にも都立高校2校のキャリア教育支援の経験をもつほか、企業とタイアップした子ども向け職業観の育成プログラムの開発・運営なども行う。第8期東京都生涯学習審議会委員。元リクルート進学ブック編集長。

総合学習のプロジェクトを1年間支えてきたものは、柳校長のぶれない姿勢、秋本先生の熱心さに尽きるでしょう。今年度は理解してくださる先生が増え、CG部との打ち合わせもいっそう充実してきました。外部スタッフとしては、生徒の課題や目的があいまいなまま依頼されたり、逆に学校側で細部まで決めてしまうと、どう応えていいのか戸惑います。芦花高校のようにお互いの意見をすり合わせて作り上げていければ、より良い内容になると思います。

さまざまな高校でお話すると、多くの先生方は「生徒が興味をもつプログラムをどう作るか」に苦労されるようですね。そこでまず、「生徒をこうしたい」というゴールを明確化することが大切だと思います。「職業観育成」といった抽象的な言葉でなく、「知らない人と話ができるようにする」のように具体的な表現を使うと、何をすべきかが見えやすくなります。

また、生徒の視点で想像力を働かせることを意識してみたいかがでしょうか。人が積極的に動くのは、それをやる意味を感じた時か、あるいは単純におもしろそうと思った時です。「生徒をこんな人を会わせたらおもしろいんじゃないか」「こういう体験をさせたら生徒はドキドキするんじゃないか」という思いつきからスタートしても良いかもしれませんね。

生徒に刺激を与える活動のひとつとして、大学生や社会人と連携した活動は多くの高校で導入されています。そこで注意したいのは、協力者にも何かしら「良かった」と思ってもらえること。例えば、高校生に自分のことを話すのは、大学生にとっても非常に良い勉強です。私は彼らの達成感や学びのためにも、大学生の事前研修は手間をかけていねいに行います。明確なメリットがない場合でも、心からお礼を言うだけで、協力者は「やってよかった」と満足すると思います。それが次回や新たな協力者につながっていくのではないのでしょうか。